

# 目 次

1 提案趣旨 .....	1
2 提案内容	
(1) 本校の現状 .....	1
(2) 学校課題の進め方 .....	2
(3) 授業の改善の実際 .....	6
(4) 外部ＩＣＴ支援員の活用 .....	9
(5) 研修を踏まえた実践（平27） .....	9
3 今後の課題 .....	10

## ICTを活用した、わかる・できる授業の実践

提案者 矢板市立矢板小学校 教諭 大類 佑一  
〃 藤田 英徳

### 1 提案趣旨

社会の急激な情報化への対応として、学校では今、教育の情報化が求められている。本校にも、電子黒板やデジタル教科書の一部が整備され、授業等で利用することができるようになった。実際にICT機器を活用したことで、児童の興味・関心を高めたり、知識・理解を深めたりできることの効果を実感した。

本校では3年前より「子どもの学びを深める情報教育の在り方」を学校課題とし、ICT機器の効果的な活用場面や方法、授業の実践を行ってきた。教員のICT機器の操作スキルは向上し、情報モラルや危機管理に対する意識も高まってきた。

本校での校内研修を通して考えた、わかる・できる授業をするためのICT機器の活用方法や授業展開を紹介する。また、研究授業に至るまでの様々な改善点や課程についても触れていきたい。

### 2 提案内容

#### (1) 本校の現状

本校は矢板市の中心に位置し、創立142年を迎える学校である。児童数はおよそ400名の中規模校であり、クラス数は各学年2クラス、特別支援学級が3クラスの合計15学級、他に通級が2クラスある。

##### ① 本校のICT機器の整備状況

現在、本校にはPC教室、職員室だけでなく普通教室にもノートPCが配備されている。本校教員はこれをを利用して大型テレビにデジタル教科書などを映すことで視覚教材として利用している。

デジタル教科書は国語、算数が利用でき、また、实物投影機は各学年1～2台が配備されている。

また、昨年コンピュータ室（40台）の機材も新しくなり、スカイメニュー等のソフトも導入され、授業の中で活用している。

##### ② 本校の教員のICT操作技術の現状

デジタル教科書の導入や、教育課程の時数管理、学校ホームページやメールの普及等で教職員がICT機器を使う場面は年々増えている。

毎年3月に行われている「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」の結果を比較してみると、研究を始めた3年前に比べ、教員のICT活用指導力は向上していることが分かる。

教材研究・指導の準備・評価などICTを活用する能力は、全国との差が-15.2

%から5.1%に上昇し、授業中にICTを活用して指導する能力は、-0.7%から8.6%へ、校務にICTを活用する能力は-27.8%から7.0%にいずれも上昇している。異動等で毎年教職員の変動はあるものの、教員のICT操作技術は確実に向上去っている。

## (2) 学校課題（研究授業と授業研究会）の進め方

### ① 研究テーマ 子どもの学びを深める情報教育の在り方

～授業のねらいに迫る効果的なICT活用の授業実践～（3年目）

### ② 研究内容

ア ICT機器を効果的に活用する授業研究

（活用場面、機器、方法を探る）

イ ICT機器の活用技能の向上（教師・児童）

ウ ICT機器を用いた教材、資料の作成

### ③ 研究の実際

#### 【実践Ⅰ】

5月28日(水)

- 授業研究事前研修（低・中・高ブロック）

6月25日(水)

- ICT研修 「SKYMENU」

講 師：システム興産

- 指導案検討会

- プレ授業（各ブロック）

- 研究授業

2-3 6月27日(金)

国語

「ともこさんはどこかな」

3-2 6月26日(木)

国語

「海をかっとばせ」

6-2 7月4日(金)

社会

「いまに伝わる室町文化」

クラス	使用したICT機器と機能
2-3 24名	デジタル教科書（画像・音声） ・画像の拡大 ・探偵の声
3-2 36名	デジタル教科書（画像） ・画像の拡大 ・文に線を引く
6-2 36名	デジタル教科書（資料・写真） インターネット動画 拡大掲示資料（水墨画） ・動画で能や水墨画や書院造りなどを見せる



インターネットを使って大型テレビに映し出す

7月30日(水)

・授業研究会（視聴覚室）

【授業参観では参観のポイントをもとに、各自が付箋に記入した。】

参観のポイント

「子どもの学ぶ姿」から省察

- 1 子どもの顔が見える位置に立つ。  
(教室の後ろには立たない。)
- 2 個と全体を見る。  
(観察する児童を決める。A児または複数児)
- 3 視点を意識しながら事実を見取る。(ICT活用の効果について見る)
  - 子どもの表情やつぶやき
  - 教師の投げかけに対する子どもの反応
  - 子どもの取り組みや変容

付箋の書き方

- 2色の付箋を使い分ける。

学びが成立している点・参考になった点	青
気になった点・疑問点	赤
- 時刻を記入 ○ サインペンで書く ○ 短い文や単語で書く

☆ 子どもの様子を通して、教師の動きを観る。

〈例〉青10:05

(A児)

物語の絵のスライドショーを興味深く見て、読書カードを書いている。

赤

9:25

○○さんへの支援の意図は？

## 話し合った内容

※○は、ICTに関するこ

〈低ブロック〉

- ◎デジタル教科書は子どもたちの意欲を高めるのに効果的だった。
- ◎操作に時間がかかるよう、前もって使い方を研修しておく。操作中も児童の方を向くように配置を考える。
- ・「話す・聞く」を重点的に指導する。→メモを取る活動を入れた。  
段階的に「聞く・話す」の訓練を取り入れる。最終的にメモを取らなくても大事なことを聞き取れるようにしたい。
- ・学級経営の充実→日頃の学級経営が大きく学習指導にも関わる。学習訓練、個別指導でのフォロー等が必要である。
- ・教材研究の大切さ→低学年にはグッズが大事。視覚的支援が必要である。デジタル教科書の効果は大きい。プレ授業では回を追うごとに深まりがある授業になった。

### 〈中ブロック〉

- ◎デジタル教科書で、線を引いたり挿絵を映したりして提示したことで、情報を共有できた。
- ◎気持ちの高まりを数値化するなどの視覚的な表現は、ICT等でできないか。
- ◎ICTの活用場面の精選→めあてに向かうために本当に必要なものか。
  - ・学習訓練、授業の展開、指導上の工夫等がなされていた。
  - ・時間配分、板書、指示の仕方等、さらに検討していく。

### 〈高ブロック〉

- ◎ICT活用と言語活動の充実を重点化して授業を組み立てた。
- ◎様々な動画により、子どもたちのイメージを膨らませることができ、効果的だった。
- ◎機器活用のスキルを身に付ける研修が必要。できるように自己研修、伝授していく。
  - ・言語活動→「キャッチフレーズ作り」はなかなか難しいところがあるが、続けることが大切。
  - ・掲示資料等、大きくて見やすかった。社会科の授業においては重要。

### 【実践Ⅱ】

10月29日(水)

- ・授業研究事前研修（低・中・高ブロック）

- ・指導案検討会

- ・プレ授業（各ブロック）

- ・研究授業

5－2 11月20日(木)

学活

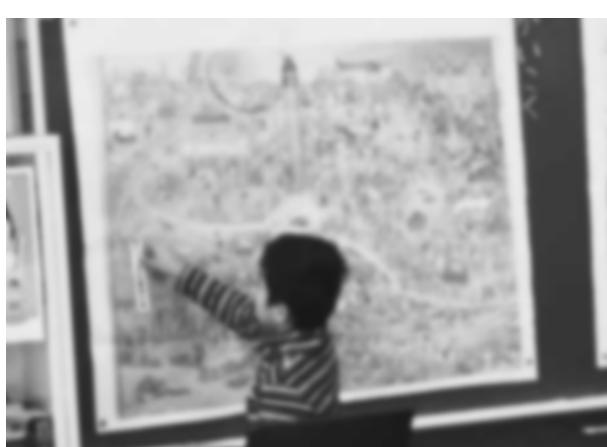
「宿泊学習のきまりを考えよう」

1－2 11月27日(木)

国語

「むかしばなしがいっぽい」

クラス	使用したICT機器と機能
5－2 37名	パソコン プロジェクター <ul style="list-style-type: none"><li>・スカイメニューを使用しての提示</li><li>・パソコンに児童が文字入力</li></ul>
1－2 35名	デジタル教科書（画像） 拡大資料 <ul style="list-style-type: none"><li>・画像の拡大</li><li>・画像の切り抜き・編集</li></ul>
4－1 27名	デジタル教科書（画像・本文） 大型ワークシート <ul style="list-style-type: none"><li>・画像の拡大・本文を色分けして提示</li><li>・画像に吹き出しを入れる</li></ul>



教科書を写真に撮り、ポスター印刷して掲示

4-1 12月2日(火)

国語

「ごんぎつね」



大型プリンターで印刷したワークシート

12月3日(水)

・授業研究

【ICTに関すること、その他のことについて  
〈参考になった点〉  
〈気になった点〉  
を話し合った。】



## 話し合った内容

### 〈低ブロック〉

- ・デジタル教科書を使ったことは、子どもの興味をかき立てていて効果的だった。
- ・デジタル教科書の画像を資料として黒板に大きく提示したのは分かりやすかった。
- ・物語の絵のスライドショーを参考にしながら、読書計画を書けている児童がいて効果的だった。
- ・シールの活用、掲示物、作業用紙等工夫してあり、子どもへの働きかけもよかったです。
- ・グループの人数や形態、作業時間等さらに検討していくとよい。

### 〈中ブロック〉

- ・デジタル教科書の色分け、拡大、保存したものを活用するなど、効果的だった。
- ・大型ワークシートの活用はグループ活動では有効だった。
- ・デジタル教科書の機能（吹き出し）等を使いこなせるとよい。
- ・話し合い活動を設定したり、他のグループの記入用紙を見に行く活動は、これから入れていくとよい。

### 〈高ブロック〉

- ・パワーポイントでの提示は、分かりやすく効果的で児童の意欲を高めた。
- ・児童が話し合ったことをグループごとにコンピュータに入力し、全体で確認・訂正できたことで理解が深まった。

- ・話合いのマニュアルに沿ってグループでの話合いができた。明確な指示であること、児童が安心して意見を言える学級経営であったことで話合いが活発になった。
- ・教室でもタブレットを利用した授業ができるなど、環境面で充実するとよい。

### (3) 授業の改善の実際



#### 【2年国語「ともこさんはどこかな】】

本校の2年生は3クラスであったため、3回授業を実践し、よりよい授業の改善に努めた。そこで、実際に自分で行ったプレ授業から本番に至るまで全3回の授業の研究過程とその改善点を洗い出し、子ども達の活動にどのような影響があったのか、またそれがなぜなのかについて考察していく。

#### ① 本時の授業の概要

教科書の中のともさんの特徴を音声で聞きながら、絵の中からともさんを探し出したり、自分で決めた人物の特徴を相手に伝えて探してもらったりして、「話す・聞く」能力を育てる単元である。



#### ○ねらい

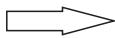
人物を探す手がかりとなる大事な事柄が分かり、落とさず聞き取ったり、話したりすることができる。

## ② I C T 機器の活用方法についての改善

### 《音声CD》

#### プレ授業その1

- ◎ 音声CDを使用すると関心が高まった。
- △ CDの速さが早く聞き取れなかった。
- △ メモを取るのが困難だった。

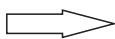


#### 研究授業

- 音声CDに合わせた掲示資料を作成した。
- 聞き取りメモを作成した。

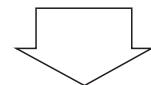
#### プレ授業その2

- ◎ 聞き取ることのできた児童が増えた。
- △ 教材研究（掲示資料の作成）に多くの時間を費やした。
- ◎ ポイントを押さえてメモを取れるようになった。
- △ メモに夢中になってしまった。



#### 研究授業

- デジタル教科書に付属されている音声機能を活用することにした。



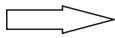
子どもの視線をテレビに集中させることができた。



### 《デジタル教科書》

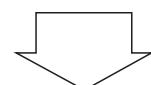
#### プレ授業その2

- ◎ 聴き取ることのできた児童が増えた。
- △ 教材研究（掲示資料の作成）に多くの時間を費やした。
- ◎ ポイントを押さえてメモを取れるようになった。
- △ メモに夢中になってしまった。



#### 研究授業

- デジタル教科書の拡大機能を活用した。



拡大したことにより、対象の色や形などの細かい部分まで一斉に確認ができた。また、児童の意欲も高まった。

### 《デジタルカメラ》

#### プレ授業その1

- ◎ 教科書の絵をそのまま「迷子さがしカード」として利用したことにより、授業に活気がでて、児童が意欲的に話すことができていた。



◎・・・効果が見られた点 △・・・効果が見られなかった点 □・・・改善策

### ③ 授業の改善に関する考察

#### ・ポイント1 「デジタル教科書使用のタイミング」

授業研究会の中で一貫してみられた意見の一つに、「デジタル教科書は子どもたちの意欲を高めるのに効果的だった」というものがある。確かに、子ども達にとっては視覚的働きかけが大変有効であり、挿絵が画面に出てくるだけでも関心が集まる様子が見て取れた。しかし、デジタル教科書はいつでも提示しておけばよいものでもない。ずっとテレビをつけたままでは、子ども達にも注目して欲しいタイミングが伝わらない場合がある。そこで、必要に応じてテレビの電源を落としたり、布を被せるなどして敢えて隠したりしてみせるのも子どもの関心を高める手段の一つである。また、子ども達の注目を集めるために差し棒などを使用することも有効だと考えられる。



#### ・ポイント2 「聞き取りのためのメモ」

プレ授業その1の時点では「話し手がどれだけ正確な情報を伝えられるか」という点にはばかり教師の意識が向き、聞き手がメモを取ることはなかった。プレ授業その2では「聞き手がどれだけ正確に情報をメモできるか」という点にはばかり意識が向き、メモを書く時間が活動の大半を占めてしまった。しかし、今回の授業の中でメインの活動は「話す・聞く」であり、聞き手がメモを取ることはあくまでも「聞く」活動の一助に過ぎない。そこで研究授業では子ども達に「メモは必要な範囲で行い、覚えられる部分までメモしなくてもよい」という意識づけをしたところ、スムーズに人物探しまで辿り着けるペアが多くなった。これは子ども達の中でメモというものが「目的」ではなく「手段」として認識されたことによる改善だと思われる。つまり、「メモを取るのは人探しをするためだ」という意識が子ども達の中に生まれたのである。

#### ・ポイント3 「探偵手帳」

授業研究会で出た意見に「低学年にはグッズが大事」と指摘するものがあった。いくら多くのICT機器を利用しようとも、子ども達が手に取って使えるものが充実していなければ学習活動を支援できたとは言えない。また、子ども達がめあてを意識しながら学習できるよう、なぜそれを使うのかということを明確にしておく方が、学習活動も活発になるのではないだろうか。



#### (4) 外部ICT支援員の活用

##### ① 外部ICT支援員による教員研修

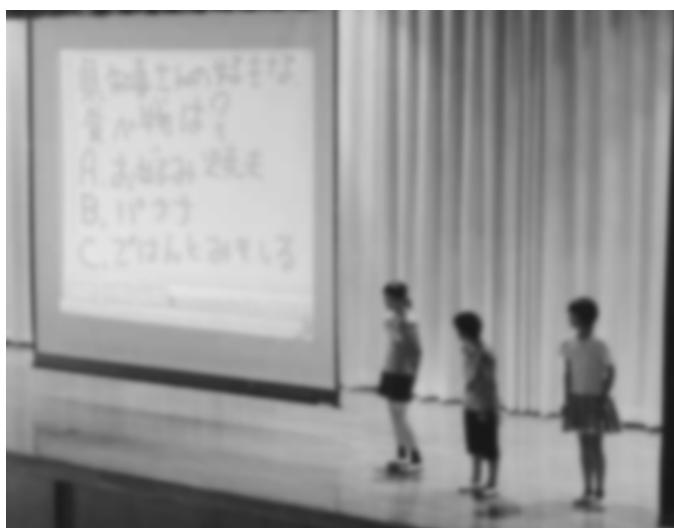
- SKYMENUの使い方、情報モラル指導のためのサイトの紹介等、教員研修を行った。

##### ② 児童を対象とした授業

- マウスの動かし方（1年）、お絵かきソフトを使った年賀状作り（2年）、インターネットの利用の仕方や、引用の仕方（3年、4年）作文ソフトを使った文集作り、パワーポイントの使い方（5・6年）情報モラルについて（6年）など、児童の発達段階に応じて計画的に児童のスキルアップを図るための授業を行っている。

#### (5) 研修を踏まえた実践（平27）

##### ① 児童会活動…実物投影機・プロジェクターの活用



「県民の日集会」での全校生を対象にしたクイズ

児童会活動で作成した栃木県のクイズを実物投影機で映し、全校生で縦割り班対抗のクイズを行った。

児童が作成したクイズをそのまま映し出したことによって、児童会の子ども達の意欲も高まり、集会が盛り上がったことで満足感も味わわせることができた。

大型スクリーンに映し出したことで、体育館いっぱいにいる子ども達が一体感を感じながらクイズを楽しむことができた。

##### ② 漢字の筆順、成り立ちの指導…「デジ漢」ドリル付録のCD-ROM

ドリルの付録のCD-ROMで、漢字の筆順、成り立ちクイズ等の学習を行っている。

やり方によっては、少しの時間でも筆順が学習でき、成り立ちクイズでは、カードをめくって完成する文字を当てるなど、ゲーム感覚で学習でき、児童は喜んで取り組んでいる。

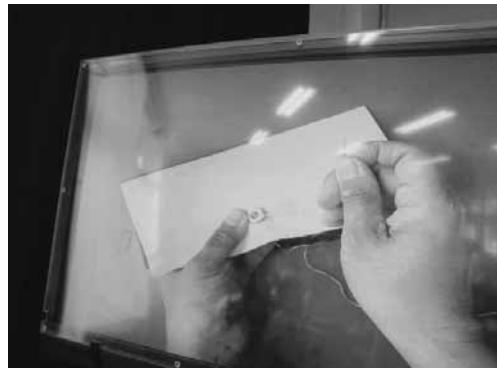
##### ③ インターネットのサイトを利用した授業（理科）

NHKのfor schoolのショートカットを教室のパソコンのデスクトップに貼り付け、授業の中で活用している。10分程度の短い番組があり、授業の導入や実験が難しい場面、まとめの場面等で映像や動画を活用することで、授業内容を深めることができる。

#### ④ 家庭科の授業…实物投影機、CD-ROMを利用した指導

5年「ひと針に心をこめて」の手縫いでは、玉結び、並縫い、返し縫いなど、実際の映像を映し出し、児童に見せながら進めた。

CD-ROMの映像も効果的だが、实物投影機で教師が解説しながら進めるのも効果的だった。



ボタン付けの手順を順をおいながら  
ゆっくり見せた様子

### 3 今後の課題

#### (1) 効果的なICT活用の場面や情報の精選

昨年度の学校評価の児童アンケートでは、多くの児童が大型テレビを使った授業は分かりやすいと感じていると答えていた。ICTの効果的な活用について3年間校内研修として取り組んできたが、ICTの活用は児童の関心意欲を高めたり、視覚による提示が理解を深めることにつながったりすることが分かった。また同時に、ICT活用に効果的な場面や、ICTを使わない方がよい場面、ICTとアナログの教材とを合わせて使うと効果的な場面があることも実感した。学年の発達段階、情報量、内容は重要な要素である。

ICTを効果的に授業で活用するには、やはり授業のねらいを踏まえ、活用する場面や使う情報を選んでいくことが必要である。ICTを単に使うことが目的ではなく、授業のねらいに迫るための1つの有効な手法であるということを忘れず、ICTをどう活用していくのかを考えていくようにしたい。

#### (2) 教員のICT活用のスキルアップ

学校は毎年教職員の入れ替わりがある。学校ごとに配備されているICT機器等の違いがあり、転勤してきたばかりの教員にとっては、操作方法等を知り、慣れるまでに時間がかかる場合がある。また、ICT機器に明るい教員とそうでない教員と、教員間でも差がある。

ICTを活用することは効果的であることは明らかなので、まず、使ってみること、必ずテレビの電源を入れる、ドリルのCD-ROMを開いてみる、などできるだけ触れることがスキルアップの一歩だと考える。使い方や便利な機能、よいICT教材など、学年間や教員間で気軽に情報を交換したり教えあったりすることがスキルアップにつながる一番の近道なので、忙しい時間の中ではあるが、教員同士で情報交換をしたり教え合ったりできる雰囲気を作っていくたい。

#### (3) ICT機器の環境整備

便利なICT機器ではあるが、環境の整備や維持にはお金がかかる。デジタル教科書や实物投影機の配備、無線LANの環境、導入したい機器等があるが、思うように配備されない現実がある。予算との絡みがあるので、毎年計画的に学校や市町に必要性を訴え要望していくようにする。

# 目 次

1 提案趣旨 .....	1
2 「校内支援体制」の基本的な考え方 .....	1
3 本校の校内支援体制の現状把握と分析 .....	2
4 チームでの指導の定着を図るための取組 .....	3
5 教職員の意識を高めるための取組 .....	6
6 実践の成果と課題 .....	10

## 校内支援体制の充実に向けて

提案者 高根沢町立阿久津小学校 教諭 見目 正恵

### 1 提案趣旨

児童生徒が抱える課題は複雑化・多様化してきており、学校においては、教職員が組織として課題解決能力を高めていくことがますます求められている。そのため、学校生活の中で、様々な課題を抱える児童生徒に教職員が組織的に対応する、校内支援体制の充実が重要であると考えた。

そのために本校では、複数の教職員がチームを組み、ケース会議を開いて指導方法を話し合ってチームでの指導を行うことと、校内研修を通して教職員の当事者意識を高める取組をしてきた。本校でのチームでの指導の実践例や、全教職員で年2回ずつ行っているQ-U活用研修を紹介しながら、校内支援体制の充実に向けた取組の成果と課題について述べたい。

### 2 「校内支援体制」の基本的な考え方

栃木県総合教育センターによる学級・ホームルーム担任のための教育相談特集2「校内支援体制構築のための手引き書（2014発行）」（以下「手引き書」）の内容から、校内支援体制は、児童生徒に関して情報を共有しながら学校全体として連携して指導や支援を行う仕組みである、と捉えた。また、同センターによる「校内支援体制構築のための参考資料」では、校内支援体制の充実のためには、既存の組織を生かした機能しやすい組織を整え、コーディネーターや推進者を中心に取り組むというシステムの構築や、個別の課題を抱える児童へのチーム支援の充実や全ての児童一人一人の学校生活の質の向上という方針で進めることが大切であると述べている。

以上を踏まえて、校内支援体制の充実に向けて、まず、組織の枠組とチームでの指導について校内で再確認する。次に、課題を抱える個々の児童へのチームでの指導（チーム支援）を中心とし、そこから学校全体へつなげていくようとする。そして、学校が一つになって児童指導が行われるようにしていきたいと考える。

なお、チームでの指導を行うに当たっては「手引き書」を参考に以下の手順で行うようにする。

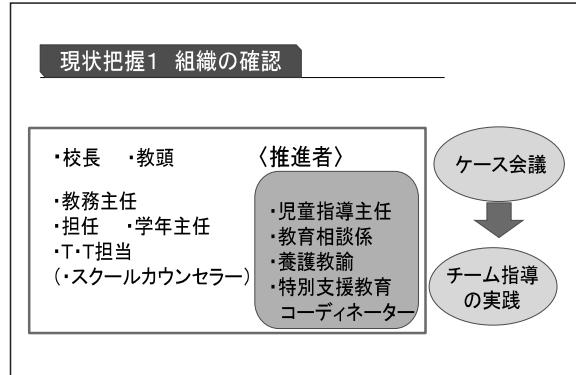
#### 《指導の進め方》

- ① 実態把握（情報収集・整理）
- ② 目標や内容・方法の検討、役割分担
- ③ 共通理解
- ④ 実践
- ⑤ 評価・改善

### 3 本校の校内支援体制の現状把握と分析

#### (1) 組織の確認

本校では、校長、教頭、教務主任、児童指導主任、養護教諭、特別支援教育コーディネーターから成る組織が校内支援体制の中心である。ケース会議にはさらに担任、学年主任、T・T教員が加わり、このメンバーでチームでの指導を行っている。ケースによってはスクールカウンセラーも加わる。



#### (2) 教職員の意識調査から

校内支援体制についての教職員の意識を質問紙によりまとめた。

[ケース会議について] (☆ケース会議参加者、★参加していない教職員)

よい点	問題を感じる点
☆協力体制はできている。	☆★ほとんど行われていない。 ★チーム以外は関係性を感じない。
☆情報が共有されている。	★指導の様子が見えない。 ★情報が全体に伝わっていない。

ケース会議やチームでの指導の実践や情報共有についてよさを感じている教職員と情報の不透明さやチームでの指導に距離感を感じている教職員がいることが分かった。ケース会議の参加の有無や、情報が伝わっていなかったことなどで意識に温度差が生じていると考えられる。

そこで、チームでの指導に関する情報の共有や、教職員への様々な働きかけを通して、全教職員が児童との関係を意識して指導していくようにしていきたい。

[チームでの指導の実践や情報共有について]

よい点	問題を感じる点
☆実態把握ができる。	☆対応策が決まらない。 ☆★時間がかかる。
☆安心感がある。	☆担任一人に任される感じ。

#### (3) チーム支援チェックシートから

「手引き書」を参考に「チーム支援チェックシート」を作成し、現状を客観的に把握した結果、不十分な部分が明らかになった。

具体的には、①では、実態把握票の活用、②では指導内容と役割分担の決定、③では教職員全体への周知、④では指導の進捗状況の確認、⑤では、指導の評価・確認である。

以上の現状把握を踏まえて、その後二つの課題に取り組むことにした。

チーム支援チェックシート	
① 実態把握・情報収集	
・複数の教職員から情報を集め、多面的に実態把握を行っているか。(○)	(△)
・実態把握票を用いて情報を共有しているか。	
② 目標や内容・方法の検討・役割分担	
・目標や内容を明確にしているか。	(○)
・目標や内容に前向きな解決策を描画しているか。	(○)
・いつ、誰が、どんな場面で行うか、役割分担をしているか。(△)	(△)
・次の会議を聞く日程を決めているか。	(△)
③ 共通理解	
・複数の教職員が協力して意見を交換しているか。	(○)
・チーム支援のメンバーに異次元に目を向けるか、協力しているか。	(△)
・教職員全体に周知しているか。	(△)
④ 実践	
・コーディネーターは責任を負っているか。(○)	
・支援の進捗状況をこまめに確認し、様子が見えるように教職員に伝えているか。	(△)
⑤ 評価・改善	
・状況を整理し、支援策を評価しているか。(△)	

図1 チーム支援チェックシート

### 校内支援体制の充実のための課題

- ◆ チームでの指導の定着を図る。
- ◆ 教職員の意識を高める。

## 4 チームでの指導の定着を図るための取組

### (1) 指導の進め方に沿った実践

チームでの指導を指導の進め方に沿って実践した。なお、課題を抱えたA児へのチームでの指導を例に考察する。

〈指導の進め方① ②〉

- ・「手引き書」を参考に児童支援シート（図2）を作成し実態把握に活用する。（進め方①）
- ・児童支援シートに指導内容と役割分担の欄（図2の太枠）を設け、ケース会議で明確に決まるようにする。（進め方②）
- ・ケース会議に本日の流れ（図3）を掲示する。（進め方②）

児童支援シート	
作成日 平成 年 月 日	記入者
△ 年 △ 組 ▲ 備考欄	性別
家庭構成	出産日数 ( ) 日
生年月日	入院日数 ( ) 日
学年	遅刻 早退 ( ) 日
学習状況	主な理由 ( )
苦情していること(生年)・気になるところ	
その中で、比較的うまくいっているところ、例外的にうまくいくところ	
対象児童のいいところ	
学級の様子及び対象児童と学級との関係	
学級・学習・友達関係で記憶、工夫しているところ(本児へ今まで行ってきた指導)	
指導目標	
指導 内 容 ・ 方 法	指導者 どの場面で行うか
担当	
関わり	
周囲	
先生の関わり	
保護者の関わり	
その他	
次回のケース会議 月 日	

図2 児童支援シート

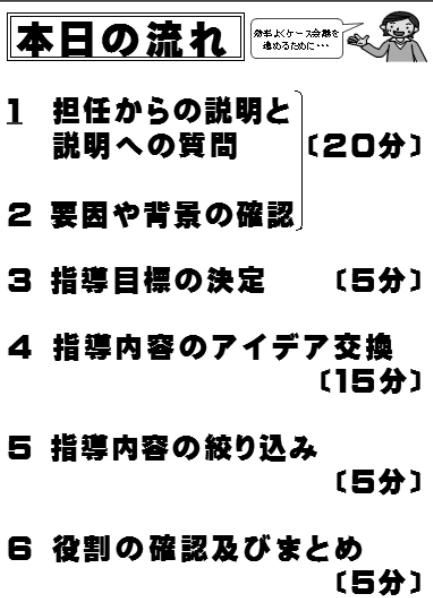


図3 本日の流れ

指導目標 学校のルール確認と巡回指導の充実

	指導内容・方法	指導者
担任の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・用事を頼み、ほめる。</li> <li>・発表の機会を増やす。</li> <li>・学級の認め合いを続ける。</li> <li>・保護者と話し、学校の様子を伝える。</li> </ul>	担任
周りの先生の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が興奮したとき、個別に毅然と指導する。</li> <li>・機会を見つけてほめる、話を聞く。</li> <li>・授業に個別に関わる。</li> <li>・定期的に巡回し必要に応じて指導する。</li> </ul>	C先生 D・E・F先生 G先生 E先生

### 結果（教職員への聞き取り・見取りから）

- ・児童支援シートにより、児童の情報が整理され、会議で現状を的確に伝えることができた。  
(担任)
- ・本日の流れがあると、内容や時間がはっきりするので、ケース会議が効率よく進んで短くなった。  
(D先生・F先生)
- ・指導内容や役割分担がはっきり決まるようになった。シートに書き込めるのもよかったです。  
(E先生)
- ・指導内容を話し合う際、担任の指導をなるべく少なくし、チームの先生の指導を多くしたほうがよいという考え方の発言が多くかった。推進者として、指導の中心は担任であることを伝えたところ、学級で担任ができそうな指導について話し合う方向に移った。《見取り》

### 〈指導の進め方③ ④〉

- ・管理職・推進者が協議し、情報共有の仕組を整備する。（進め方③）
- ・指導者は、児童に指導したことを、チーム支援個別シート（図4）に入力し指導の様子を見えるようにする。（進め方④）

#### 〔情報共有の仕組〕

日 常⇒学級の児童に気になる様子が見られたときは、担任→学年・学年主任→児童指導主任→推進者（教務主任・教育相談係・養護教諭）→教頭→校長という順に報告していく。  
ケース会議⇒ケース会議参加者が、会議中に出た詳細な情報を共有する。会議での個人情報は守秘義務。  
朝の打合せ⇒ケース会議で出た児童への指導の概要を児童指導主任から全教職員に口頭で伝える。  
必要に応じて⇒全教職員は必要に応じて校内のパソコンの共有フォルダ内の児童支援シート（図2）やチーム支援個別シート（図4）を閲覧し、内容を確認する。

#### 〔A児への指導とA児の様子〕

指導したこと（・）、児童の様子（A）	記入者
A持久走大会が近づき、休み時間に教室前の廊下を通りかかると「持久走は嫌い。意味がない」と話してきた。	C先生
・上級生を例に、苦手でも頑張って練習して1位になった先輩がいることを話した。「やってみるとのびるよ」と走る活動に誘ってみた。	C先生
・空き時間に、教室を覗くと離席していた。担任の許可を得て別室に移動。窓際や図書室は落ち着くと話す。授業後、担任に伝える。	E先生
A個別だと穏やかで、落ち着いて話を聞く。	E先生
A持久走大会で20位。初めての完走。うれしそうにカードを見せる。	担任
・持久走を避けずに走りきったことをほめた。	担任

図4 チーム支援個別シート（一部抜粋）

### 結果（教職員への聞き取り・見取りから）

- ・情報がスピーディに伝わるようになった。（多くの先生方）
- ・指導したことを文字として残すと、だれがどんな指導を行ったかが分かる。（E先生）
- ・チーム支援個別シートを見ると指導の状況を確認でき、チームとしての意識づけになった。  
(C先生)
- ・チーム支援個別シートはなかなか入力できなかった。（D先生）
- ・チーム支援個別シートの入力や閲覧は、数名の教師に留まっており、今後は入力について改善する必要がある。《見取り》

### 〈指導の進め方⑤〉

- ・本日の流れ2（図5）を示し、短時間で終了する。
- ・「手引書」を参考に評価・改善を行う。

本日の流れ 2 指導の評価・改善	
1 担任からの支援の状況と児童の変容報告	[5分]
2 支援をした先生方からの報告	[5分]
3 目標は達成できたか	
4 なぜ達成できたのか	[10分]
5 教職員間で連携が図られたか	
6 再度児童の実態を確認する	
7 指導の目標や内容の見直し	

図5 本日の流れ2

(A児への指導の評価・改善)

評価の観点	結果	結果（教職員への聞き取り・見取りから）
①目標達成	十分達成できたとはいえない。	・A児は、他との関わりを求め、見てとうサインを出していることに気付いた。(担任・E先生)
②達成要因	児童に合わせた目標ではなかった。	・評価・改善の機会があると指導の状況やA児の変容を確認し合えるので、別のケースでも行うとよい。(H先生)
③連携	担任とともに指導に関わり、連携できた。	・チームでの指導で、担任として安心感がもてるようになり、A児にゆとりをもって指導できるようになった。(担任)
改善の観点	内容	・観点に沿った評価・改善は、焦点化して話し合えた。《見取り》
①実態再確認（A児の変容）	<ul style="list-style-type: none"> <li>離席や乱暴な言葉が減り、穏やかに話すことが増えてきた。特に個別に話すと落ち着く。</li> <li>課題に向かえるようになった。</li> <li>係の仕事を熱心に行うようになった。</li> <li>◎A児には個別に話し、認める場が必要。</li> </ul>	・チーム全体で指導を振り返ることで、指導の効果が確認できやりがいを感じたメンバーが多くいた。《見取り》
②目標・内容の再設定	<p>目標：「ほめ、認める場を増やす」へ改善            指導：A児への具体的な説明をする。(担任)            内容 活躍できる場を与え、担任や学級の仲間が認めていく。(担任)</p>	

(2) 推進者同士の連携

推進者は、時折集まって、それぞれが普段集めた校内の児童指導に関する情報交換を行った。必要に応じてケース会議開催の検討も行った。推進者は複数いるため、情報を管理職に伝えたり、指導の進め方に沿ってケース会議に向けての準備をしたりするなど、分担して行った。また教職員への働きかけとして、打合せや資料準備等を協力して行いながら、職員会議の場を利用して、交代で教職員への共通理解を図るように努めた。

(3) 考察

以上の実践から、チームでの指導の定着を図るためのポイントは次の五つであると考える。

一つ目は、指導の進め方の手順に沿ってチームでの指導に取り組むことである。特にケース会議で具体的な指導内容や役割分担が決まり、チームでの指導が組織として行われるようになった。

二つ目は、推進者同士の連携である。複数の推進者が情報交換や打合せをしながら連携して動いたことで、お互いが補い合えて、校内の組織の中心として指導の進め方

に沿ったチームでの指導を着実に進めることができた。分担して進めたことで役割も軽減できた。

三つ目は、管理職の理解を得ることである。推進者が管理職に事前に説明したり、相談したりしたことで、チームでの指導や全教職員への働きかけが行いやすくなり、情報共有も進んだ。

四つ目は、チームでの指導の進捗状況を教職員が確認できるように工夫することである。今回は、指導したことをチーム支援個別シートに入力する方法をとったが、活用は難しかった。職員会議の後などに、シートへの入力や閲覧の時間をとるなど、指導状況の可視化を工夫することが必要である。

五つ目は、チームでの指導の一連の取組の効率化である。学校の現状に合わせた自校化や、ケース会議の規模や時間を適宜調整するなど、限られた時間の中での実践が、定着の鍵となると感じた。

## 5 教職員の意識を高めるための取組

### (1) 校内研修会の実施（年2回のQ-U活用研修）

#### ① 第1回Q-U活用研修〈H26.7.16(水) 15:20~16:20〉

講師 栃木県スクールカウンセラー 木村佳穂先生の講話

高根沢町では、平成26年度から、町の予算で町内の全小中学校で年2回のQ-Uを行っている。各校ではQ-Uの結果を学級の児童指導に生かすための職員研修も行っている。

本校では平成26年度の第1回目Q-U活用研修として、講師を招いて専門的な立場から、改めてQ-Uの結果の見方や分析についての内容や、それを学級経営にどう生かしていくのか、担任として自分を振り返って指導にどのような傾向があるのかなど、詳しい話をしていただいた。その後学年に分かれて、学



級児童への指導について話し合う場面では、木村先生から具体的なアドバイスを得ることができた。

#### ② 第2回Q-U活用研修〈H26.12.24(水) 15:20~16:30〉

2回目のQ-Uの結果を基に、教育相談係が中心となって活用研修を行った。まず、学年をチームとして情報を共有し合い、指導内容を考え合う場であることを共通理解する。各学年のグループの話合いには担任でない教職員もそれぞれ入る。次に、Q-Uの結果から各学級の特徴や児童について確認をした後、今後の指導内容を出し合う。出された内容は付箋に書き、それぞれの学級のQ-Uの結果の紙に貼っていく。その際、教育相談係は各グループを回り、すぐに実行可能な指導について

考えることや、出された考えはお互いに肯定的に捉えるように助言した。

今まで担任一人でQ-Uの結果を見て、自分の学級への指導について考えていたものを、学年単位に広げ、情報を共有し合ってお互いに指導方法を考え合えるようにした。これによって、学級担任だけでなく、学校生活の様々な場面で、複数の関わりができるようになり、学年のチームでの指導につながった。

研修順序・内容	資料・準備物
1 本日の研修内容についての説明（教育相談係） 15：20～15：30	各自用意するもの ・係からの資料
2 Q-Uの結果分析 15：30～15：45 ・色分け作業（各自）	各学級のQ-Uの結果 ・マーカーペン 4色 (桃・黄・青・緑)
3 学級指導方法検討会（各学年ごと） 15：45～16：30 ・各学年に分かれ、学年で各学級の今後の指導方法についてアイデアを出し合う。 1組について（15分） 2組について（15分） 3組について（15分）	係が準備するもの ・付箋 ・マイク ・ホワイトボード
<b>※留意点</b> ◆批判しない。 ◆すぐにでも実践可能な、行動レベルでの案を出し合う。 ◆個別と学級全体にできる指導のアイデアを出し合う。	
備考：特別支援学級担任・担任以外の先生は関係のある学年に入ってください。	



第2回Q-U活用研修の様子

### ある学級についての協議内容（第2回Q-U活用研修から）

#### ～学級全体への指導～

- ・ペアやグループでの活動を通して、人間関係を深める。
- ・学習や作業においてやり方を具体的に教える。（順番を示す。）
- ・班遊びを増やし、誰もがリーダーになれる機会を作る。

#### ～個別の児童への指導～

- ・小さな頑張りを認め、励ます。（シールもあり）
- ・できる役割を与える、学級に関われるようにする。

#### 教職員の感想から

- ・結果を見せ合って話すことで、学年全体で情報共有ができた。
- ・学年で指導について話し合うことはとてもよく、学年での複数対応のきっかけになった。
- ・T・Tの担当としてそれぞれの学級の様子や気になる児童が分かったので、これを基に児童に関わることができる。
- ・教職員全体で集まって児童理解の研修をしたので、校内での指導への意識が高まると思う。
- ・いろいろな指導をアドバイスしてもらえて参考になった。

## (2) 職員会議での共通理解

普段の児童観察と各学級のQ-Uの結果から、課題を抱えた児童について、校内での学級以外の所属や指導を一覧表（表1）にまとめた。それを見て教職員が自分はどこで関わられるかを分かるようにし、職員会議で共通理解を図ってみんなで目を向けて指導していくようにした。

表1 共通理解を図るための一覧表（例）

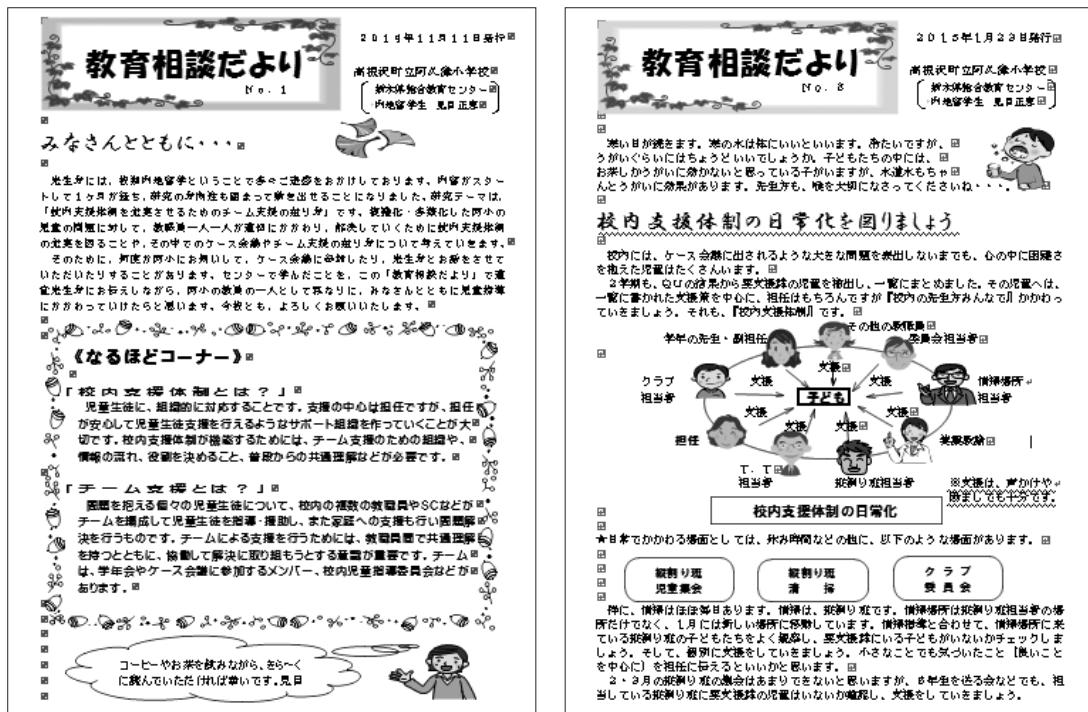
名前	得意なこと	縦割班	清掃	委員会	クラブ	指導内容・方法
B	計算 読書	6班	3の1	動物	鉄道	<ul style="list-style-type: none"><li>・鉄道の話をきっかけに声をかける。</li><li>・文章を書くことが苦手なので事前に手助けをする。</li></ul>

また、毎月1回の縦割り班で行う児童集会や、毎日の縦割り班清掃は、担任以外の教職員が直接児童と関わる場である。共通理解を図った児童への指導を手がかりに、全教職員が、班の児童一人一人に目を向けて活動でのよさを認める言葉かけを行うようにした。

## (3) 教職員向け教育相談だよりの発行

全教職員一人一人への働きかけとして、校内支援体制に関する情報を教職員で共有するため、教育相談だよりを発行した。チーム支援における指導の進め方や、児童支援シートやチーム支援個別シートの入力や閲覧の仕方なども載せ、配付時に校内支援

体制の推進者から一言説明を加えるようにした。



### 教職員の感想

- チームでの指導の進め方が分かった。
- 校内の体制の重要性を改めて感じた。
- 読む度に、児童へ丁寧に関わることや、今自分ができること等について振り返るよい機会となっていた。
- チームでの指導やQ-Uの結果を常に頭に置いて、児童と関わることができるようになった。
- そのときに合った内容で、とても参考になったし、読むことで周りの先生方の意識が少し変わった気がする。
- 日頃「なぜ、どうすれば？」といったことの解決のヒントになった。今後もぜひ、担任の疑問等が解決できるような特集を組んでいって欲しい。

### (4) 考 察

実践終了後の教職員の意識の変化を知るために、質問紙により確認した(図6)。全体的に多くの教職員が、チームでの指導の大切さを認識し、学年や校内に視野を広げた指導を意識している。

また実践開始時の意識調査で、問題を感じると述べていた教職員に、個別に聞き取りを行ったところ、どの教職員も改善を実感した感想を述べていた(表2)。

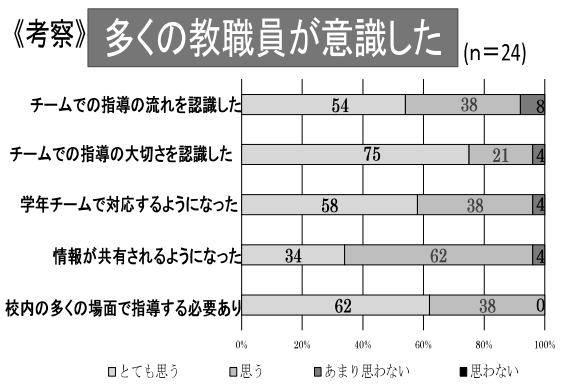


図6 教職員の意識調査の一部

表2 教職員の個別の意識調査（10月→2月）

ケース会議	ケース会議
対応策が決まらない。 時間がかかる。	➡ 指導や役割が明確になった。 以前より短くなった。
担任一人に任される感じ。	➡ 多くの先生が関わっている。
チームでの実践や情報共有	チームでの実践や情報共有
ほとんど行われていない。 チーム以外関係性を感じない。	➡ チームとして行われている。 学年や校内全体を意識した。
指導の様子が見えない。 情報が全体に伝わっていない。	➡ 指導について情報が全体に伝わるようになり、 知ることができた。

以上の結果から、教職員全体の意識を高めるためのポイントは、次の三つであると考える。

一つ目は、校内研修会という同じ場での共通体験である。学年の各学級や児童への指導について話し合う言わばミニケース会議の体験により、今までケース会議やチームでの指導に直接関係していなかった教職員が、複数対応の意味を理解するきっかけになった。

二つ目は、繰り返し行った共通理解である。個別の指導を全校に向けることを、推進者が職員会議の場で繰り返し伝えた。教職員は、縦割り班活動などの場で担任の枠を超えて関わることや、児童一人一人に目を向けていくという、具体的な場面での指導のイメージをもつことができたと考える。

三つ目は、教育相談だよりを活用した継続的な情報提供である。文面での啓発により、教職員は校内支援体制の情報を得て、内容を自分の中に取り込み、意識して児童指導を行うようになった。

## 6 実践の成果と課題

### (1) 成 果

課題を抱えた児童に対して、理解を深めながら組織的に対応することで、個別の児童に変容が見られ、学級全体の児童にも変化が表れてきている。

校内支援体制をより充実していくためには、学校のシステムとしての基盤を固めることと、中核となる推進者やチームだけでなく、全教職員が人とのつながりを大切にして、当事者意識をもって児童一人一人に関わることが重要であることが分かった。

### (2) 課 題

教職員の前向きな意識を継続するためには、学校の限られた時間の中で、更にケース会議や一連のチーム支援を効率よく行うことが課題である。また、校内研修の場を生かして、教職員が常に意識できるように共通理解を図っていくことも重要である。

今年度は、ケース会議を通常の規模の他にも、ミニケース会議や学年のケース会議を行うようにしている。問題が大きくなる前に早期発見・早期対応の意味でも効率よく、迅速にチームで対応するための取組は今後も行っていく必要がある。そのためにも、今回の取組を、今後も改善を加えながら継続していくことが大切である。

今後は、組織の力とこれまでの実践を活用して、問題を未然に防ぐ指導の充実にも取り組んでいきたい。